中年期における人生の分岐点に関する研究
── 男性のライフヒストリーの分析 ──

乾　　哲　郎

［問題と目的］

これまでのさまざまな研究において，中年期は大きな変化が起こりやすい時期であることが明らかにされてきている。しかし，なぜ中年期に大きな危機が訪れるかということに関しては必ずしも一致した見解が確立しているわけではない。また，すべての人に大きな変化が起こるわけではないが，どのような人に起こり，どのような人に起こらないかについての研究も行なわれてきていない。そして，中年期の変化は，中年期全般というよりも，その前半の時期に起こりやすいとする見解が多く見られる。

以上の諸点を考慮して，本研究においては，次のような点に関して検討し，中年前期がどういう時期であるかについてのひとつの仮説を作成し，男性の中年前期における変化の様相を表すモデルを作成することを目的とする。

①中年前期は多くの人にとって，分岐点となる時期なのか。

②中年前期の分岐点は，どのようなことを契機にして始まるのか。

③中年前期が分岐点となる人とならない人の違いはどこにあるのか。

④その分岐点においてポジティブな変化をする人とネガティブな変化をする人の違いはどこにあるのか。

ところで，これまでの中年に関する研究では，世代差に関してはほとんど考慮されてきていない。しかし，特に成人期以降の人生には，その時の時代の状況がかなり大きな影響を与えるし，さまざまな事件の対処のしかたにはそれぞれの人の人生観が色濃く反映されるであろう。そして，世代の違いによる人生観の違いはこれまでも明らかにされてきている。日本における従来の中年論は戦前世代，団塊世代の中年について多く語られてきているようである。本研究においては，ポスト団塊世代の中年期の男性の特徴に関する何らかの仮説を提起することも，目的のひとつとする。

［方　法］

44歳～46歳の男性14人に対して，面接調査を実施した。

［結果と考察］

1．それぞれの事例の概要と分岐点という観点からの検討

分岐点の様相により，次の３つの群に分類し，各事例の分岐点について検討した。

A群‥‥ネガティブな事件を契機に何らかの変化を求めた事例

B群‥‥特にネガティブな事件はないが，何らかの変化を求めたり，今後の人生について深く検討した事例

C群‥‥明確な変化を求めていない事例

2．各群の検討

［A群］

この群には６つの事例が含まれるが，どの事例も中年前期に割合大きなネガティブな変化が生じており，みなそれに対して不満や不安を感じている。しかし，その後の対応はそれぞれの事例によって異なっている。「不満解消への努力」（現在の環境や自らの価値観の大きな枠組みの変更までには至らないもの）を行ない，それに成功した者と失敗した者，「新たな道の模索」（現在の環境や自らの価値観の大きな枠組みの変更まで検討するもの）を行ない，それに成功した者と模索中の者，「不満解消への努力」が失敗した後，「新たな道の模索」に向かった者などが見られた。

［B群］

３つの事例がこの群に分類された。これらの事例には，A群のようなネガティブな事件は生じていないが，「これまでの人生の目標の一定の達成」，「恒常的な不満足感」，「人生の選択肢の到来」が，何らかの変化や人生についての検討をもたらす上で，大きな役割を果たしたと考えられる。

［C群］

この群に分類された５つの事例は，20代に決めた道を歩み続け，あまり大きな変化が見られないまま40代半ばに至っている。これらの事例も，今後何らかの大きな変化が生じ，A群またはB群に含めることになる可能性は十分あると考えられる。しかし，この群の事例のうちのいくつかは，A群やB群のような大きな変化が生じにくいようにも思われる。

3．世代差の視点

本研究の14事例には，戦前世代，団塊世代に関して言われてきた「会社と自分を一体化して，他のすべてをかえりみずに働いてきた」ような状況はほとんど見られなかった。また，自らの成功の象徴として何かお金でかえるもの（たとえば，マイホーム）を手に入れることへの執着の強さも見られなかった。

従来の日本の中年論では，仕事上のネガティブな事件が自らの存在価値そのものの否定に結びつくことが，中年期の危機の中心的部分として語られてきた。そして，中年期には価値観を180°変えなければいけないような変化が求められるとされてきた。しかし，本研究の被験者であるポスト団塊世代の中年の男性には，そのような見方はあてはまらない。仕事上のネガティブな事件は大きな不満や不安の根源ではあるが，「会社こそすべて」ではなく，さらに，仕事以外にもそれと同じぐらいかそれ以上に価値を認めているものを持っているため，価値観の180°の変化は必要ではない。

しかし，だからといって，問題の解決が容易であるというわけでもなく，自らの人生を自信を持って生きてきているというわけでもない。むしろ，会社と一体化することによってアイデンティティを確立することができないポスト団塊世代は，より実質を伴うアイデンティティの基盤を求めざるを得ず，それ故にアイデンティティを確立できた時はそれはかなり強固なものとなるであろうが，往々にして十分に確立できないまま，自分に自信が持てないまま中年期を迎えることになるのではないだろうか。この世代にとっての中年期は，これまでの自分の人生観がそれほど間違ってはいなかったことを確認し，この先の人生を自信を持って歩んでいく出発点とする時期と言えるのではないだろうか。

4．総合考察

(1) 中年前期はどのような時期か

中年前期は，何らかのネガティブな事件などにより不満が生じ，それを解消する道を模索する中で，自分が人生の中で本当に求めているものが何であるのかということにまで考えが発展していきやすい時期であると思われる。しかし，中年前期を過ぎると安定した時期になるというわけでもなさそうである。本研究の事例においても，中年前期に生じた問題が解決され得ないまま中年後期に入ろうとしている者，中年後期に大きな変化を考えざるを得ない状況の者などが，割合多く見られた。

そして，問題が解決できないこと，今後も大きな問題が生じそうな状況であることは，現在の不況という日本の経済情勢と大きく関わっていると考えられる。

(2) 中年前期における変化のモデル

本研究の14事例の変化をカバーする「中年前期における変化の様相のモデル」を作成した。このモデルには，何をきっかけにして，また，どのような状況を背景にして中年期の変化が始まるのか，そして，それにどのように対処するのか，それぞれの事例による対処の違いは何に起因するのか，その対処が成功するか失敗するかを左右する要因は何かなどの点が組み込まれている。

ネガティブな事件が起こっても，その人の価値観によっては不満を感じず，何の行動も起こさない場合もある。何らかの不満が生じた場合も「不満解消への努力」を行なうとは限らない。解決の可能性，不満がどれぐらい大きいか，その不満をそのままにした時に今後どうなっていくかなどについてどう認識するかによって，その後の行動は変わってくる。あきらめて何もしない場合もあるし，ただちに「新たな道の模索」に向かう場合もある。「不満解消への努力」が成功するか否かは，その努力の大きさ，努力の対象との力関係，属している環境の許容力などに左右される。「新たな道の模索」を行なうか否かは，その道が見つかる可能性をどう認識するかや不満の大きさによって決定される。そして，新たな道が見つかるかどうかは，その個人の能力やこれまで積み重ねてきた実績，不満の大きさ，家族のさまざまな条件，経済的条件などに左右される。そして，現在の日本の状況では，新たな道が見つかるのは決して簡単なことではなく，模索の結果，積極的に現状維持を選択することや，さらに時間をかけて模索を続けるという道を選ぶことも，かなり多くあると考えられる。